

回廊屋根の谷の納まり

—第一次大極殿院の復原研究17—

1 はじめに

第一次大極殿院回廊（以下、回廊と称す）は、発掘調査から、礎石建ちの側柱と棟通りに築地を備える築地回廊で、柱間寸法は桁行15.5尺等間、梁行12尺×2間に復原できる（『紀要 2014』）。また、現存建築、絵画資料等の検討成果から、架構は二重虹梁蓐股、三棟造で、四隅は寄棟造状の屋根形式と考えられる。

回廊屋根で問題となるのは、入隅にできる谷の納まりである。回廊屋根の谷は、平の部分より勾配は緩くなるが、雨水が集中する箇所、雨漏りしやすい特徴をもつ。

既に復原整備をおこなった推定宮内省築地塀や東院庭園の大垣の入隅部にも、同様に谷がある。前者では、第20次調査で出土した凸面に粘土を貼り付けて段を設けた瓦（以下、有段平瓦と称す）を谷に葺いた瓦（谷樋瓦）と推定し、この瓦の厚みを薄く、曲率を小さく調整して使用した。後者では、通常の平瓦の1.5倍の長さをもつ、出土遺物には例のない平瓦を作製して谷樋瓦とした。いずれも出土遺物にはない瓦を使って谷を復原している。

本稿では、回廊の谷樋瓦として用いる可能性のある瓦を検討し、その瓦から想定できる谷の納まりを検討する。（村山聡子）

2 谷樋瓦として用いる可能性のある出土瓦

平城宮跡で出土した瓦のうち、谷樋瓦として用いる可能性のある瓦には、平瓦と有段平瓦がある。

平瓦 第一次大極殿院創建期の平瓦は、截頭円錐形の桶を用いた粘土板桶巻き作りである（『平城報告XⅦ』）。その多くは回廊付近から出土しており、第一次大極殿院全体に用いられたと考えられる。第一次大極殿もこの平瓦を用いて復原した。

谷樋瓦と考えられる、通常の平瓦より幅が広い、もしくは曲率が大きい平瓦は、出土していない。

有段平瓦 藤原宮跡では複数点出土しているが、その量は軒平瓦等と比較してもわずかである。また、回廊もしくは塀の隅部を含む調査区等（藤原第70・107・125・160次）で出土することから、谷樋瓦の可能性が指摘されて

きた（『年報 1992』、『紀要 2001』ほか）。

平城宮跡では推定内膳司跡（平城第20次）で1点出土しているのみである（図8）。ただし、これは、胎土や焼成、製作技法から藤原宮の瓦と判明している。また、この瓦とともに藤原宮の瓦が多数出土することから、藤原宮から持ち込まれた瓦が平城宮では使用されずに廃棄されたことが伺える。そのため、平城宮跡出土の有段平瓦を第一次大極殿院所用の瓦と考えることは困難である。

（今井晃樹）

3 谷の瓦の納まり

回廊屋根の勾配 既住の検討から、回廊の軒の出（側柱心から茅負下角まで）は8.0尺、二軒に復原した。これに回廊の柱高や南門初重の軒高等を考慮すると、回廊の垂木勾配は、地垂木5.0寸、飛檐垂木3.6寸に復原できる。これにともない隅行の飛檐隅木の勾配は2.5寸となる。

瓦勾配の検討 勾配が緩い箇所に瓦を葺く場合、瓦自体の勾配を確保できないと、野地へ水を引き込んでしまう。瓦勾配は、現代では通常1.5寸以上、最低1.2寸が望ましいとされる。現存する古代建築は、後世の修理で屋根をたびたび葺き替えているため、創建当初の勾配を正確に把握できない場合が多い。

そこで、隅行の飛檐隅木の勾配に、平瓦および有段平瓦を葺いた場合に、適切な瓦勾配を確保できるかどうか、次の4通りの図を作成して検討した（図9）。なお、平瓦の寸法は、第一次大極殿の復原に用いた平瓦に倣った¹⁾。有段平瓦は、谷樋瓦の可能性を指摘されてきた瓦であることに鑑みて検討対象とした。

- ①平瓦：葺足5寸（平部と同じ）。瓦が3枚重なるため、瓦が1枚割れても野地に水が入らない構造となる。現代における文化財建造物の修理工事でも、基本的にこの重ね代を考慮して葺足を設定している。
- ②有段平瓦：段の存在から葺足は5寸4分に限定され、瓦は3枚重ねとなる。
- ③平瓦：①の葺足を8寸まで延ばして、瓦勾配を確保する。これにともなって瓦は2枚重ねとなる。
- ④長さ1.5倍の平瓦：瓦勾配を確保しつつ、3枚重ねとするためには、長さが1.5倍以上の平瓦が必要となる。東院庭園部分の築地大垣の入隅では、この方法を採用している。

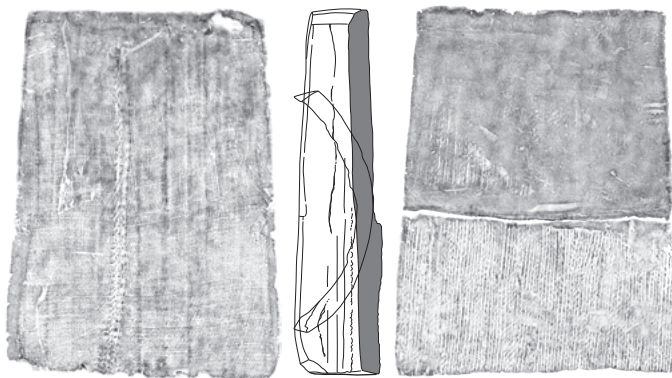


図8 平城第20次推定内膳司跡出土の有段平瓦 1:8

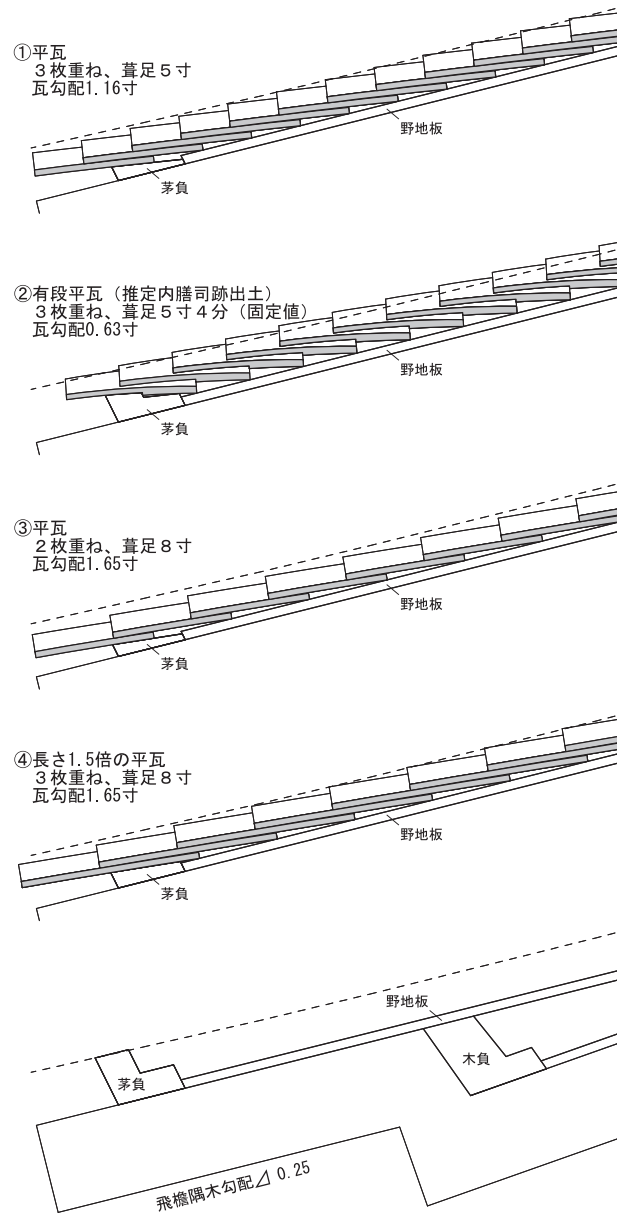
作図の結果、瓦勾配は①1.16寸、②0.63寸となり、いずれも1.5寸に満たず、雨水を野地へ引き込む可能性が高いことが判明した。③および④の瓦勾配は、ともに1.65寸となり、必要な瓦勾配を確保できる。ただし、④のような長い平瓦は出土していない。

谷幅の検討 回廊屋根は、棟から軒先までの水平距離が20尺あり、現存する回廊で最大の東大寺廻廊（江戸時代中期）より大きい。そのため、谷に流れ込む水量も多く、相当量の排水能力が必要となる。日本の現存建築で瓦葺の回廊に入隅がある事例²⁾では、谷の幅は基本的に平の部分の平瓦の幅より広く³⁾、首里城（1992年復原）⁴⁾を除いて、谷は1列である。ただし、前述のとおり、平城宮跡では、幅が広いまたは曲率が大きい平瓦は出土していない。

以上から、谷の復原には次の3案が考えられる。出土遺物を尊重した2案のほか、出土遺物はないが、木樋も想定できる。

- a：平瓦1列。日本の事例から谷を1列とする。ただし、降雨量が多い場合、雨漏りする可能性がある。
- b：平瓦2列。1列あたりに流れ込む水量をaの半分にできる。ただし、日本での事例は首里城のみ。韓国では景福宮や昌徳宮の回廊（ともに19世紀）等に事例が比較的多数あるが、谷の軒先を受ける火打ち状の材が必要となり、古代まで遡る技法が不明である。
- c：木樋。瓦の幅に関わらず、谷の幅を広くすることが可能である。ただし、推定の域を出ない。（村山）

まとめ 以上の検討から、回廊の谷樋瓦として屋根勾配と矛盾がない出土資料は平瓦と考え⁵⁾、葺足8寸、瓦勾配1.65寸の2枚重ねと考える。また、類例等を勘案すると、排水能力に問題は残るものの、谷幅はa：平瓦1列が妥当と考える。（今井・村山）



破線：谷に接する平部の平瓦の下端想定ラインを示す

図9 瓦勾配の検討

註

- 1) 奈文研『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究4 瓦・屋根』2009。
- 2) 法隆寺西院廻廊（飛鳥時代）、平等院鳳凰堂両翼廊（平安時代中期）、法隆寺東院廻廊（鎌倉時代前期）、春日大社本社廻廊（西北隅、桃山時代）、瑞巖寺廊下（桃山時代）、石清水八幡宮廻廊（江戸時代前期）、伊佐爾波神社廻廊（江戸時代中期）、東大寺廻廊（江戸時代中期）の計8例。
- 3) 平等院鳳凰堂両翼廊、春日大社本社廻廊、東大寺廻廊の谷は、銅板で納めている。
- 4) 創建は14世紀頃とされ、その後度々焼失、再建されている。1992年の復原は、1945年の戦災により焼失した1715年再建の正殿。
- 5) 本稿はあくまで平城宮第一次大極殿院回廊の谷についての検討である。平城宮跡出土の有段平瓦は、一軒で垂木勾配を4.8寸以上とすれば、谷樋瓦として瓦勾配は確保できることを作図から確かめている。